（別紙２）

審査の結果の報告　　氏名　矢内賢二

本論文は、明治期東京の歌舞伎を対象に新聞・雑誌など出版メディアに掲載された「劇評」・「型の記録」・「見たまま」の再評価を試みたものである。論文の構成は、序に続き第一章「明治期における劇評の諸相」、第二章「歌舞伎興行と出版メディア」、第三章「型の記録の成立と展開」、最後に結が付く。

第一章では、明治前期の「劇評」が対象となる。六二連の『俳優評判記』と新聞の劇評が「黒人（玄人）」と「素人」、「守旧」と「新興」と二分化され、六二連の劇評は新聞劇評の速報性を欠き、新聞劇評も的確な批評の方法を確立することができない。三木竹二は、六二連の専門的な知識と、新聞劇評家の戯曲・写実・合理重視の姿勢を受け継ぎ、歌舞伎の劇評の基準を策定しようとした。著者はその特色を、①戯曲の重視、②批評の基準策定への意識、③他の劇評への意識と言及、④型の記録の推進、と四点にまとめている。

第二章では、明治中期の歌舞伎の「際物」が対象となる。彰義隊二十三回忌を当て込んだ「際物」上演における、出版メディアによる報道の宣伝効果が分析される。その一方で、日清戦争を当て込んだ歌舞伎の「際物」では、戦闘場面の迫真性・報道性において川上音二郎の壮士芝居に圧倒された。その結果、歌舞伎は保守的な傾向を強める。著者は、そのような趨勢の中でも竹柴其水の世話場「ラシャメンの別れ」に伝統的な作劇術の価値を認め、五代目尾上菊五郎の歌舞伎の際物の演技が観客に受け入れられたことに着目する。このような伝統的な劇作術に基づく演技術が「型の記録」の対象となった。

第三章では、明治後期における三木竹二の「型の記録」が対象となる。「型の記録」に先立って、明治前期の『歌舞伎新報』には戯曲（台帳）が「筋書」として公開された。著者は、それを観客の視点から記述された先駆的なものとして位置付ける。「型の記録」では、「戯曲」に続いて「演技」が文字によって記録される。三木竹二は、「舞台装置」「衣裳」「下座音楽」など「付帳」を公開し、役者の談話形式による演技の段取りを記録した。「型の記録」は、大正期には『演芸画報』の「見たまま」になった。「見たまま」は、読者に観劇の疑似体験をさせる娯楽性が強くなり、客観的な記録の性格を失ってしまう。

著者は、「型の記録」を「芸能の視聴覚的要素を言語によって捕捉し資料化・資源化」したもので、「現在の舞台創造の現場でも過去の上演形態を推察するための重要な資料として活用されており、芸能を対象とする形態資料学、ひいては広く芸能の文化資源化を考えるときに非常に興味深い実践例」だとする。国立劇場で古典芸能の復活上演に携わってきた著者ならではの視点である。本論文において、「型の記録」の持つ文化資源としての価値が解明された点は高く評価されるものである。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。